

専修大学経営研究所台湾企業調査団に同行して ——銘傳大学への訪問と専修大学台湾校友会との交友に係わらせて一言——

高 澤 十四久

《はじめに》

経営研究所では、通例隔年で海外企業調査を企画し、これを実施してきている。最近、二年連続で韓国の企業調査が行われた。今振り返ってみてもこれらの調査はじつに実り多いものであった。企業調査の準備、企画そして実施に当たって、韓国の有名大学出身の一人の教授がお持ちの貴重な人脈を巧に駆使されて調査を成功に導くよう働かれたが故に期待以上の成果が得られたように思われる。韓国において、学閥そして個人の人脈は、いまだ日本以上に有効なのであろうか。興味をそそられるところである。より広く**社会の価値**、**文化**そして**宗教**は、企業の、組織の、そして個人の行動とどのように係わりあっているのだろうか。以前から私の脳裏に付きまとして離れがたい問題の一つである。このような問題意識をもって、今回行われた台湾企業調査（2006年3月12日～15日）の全体ではなく、その一部にすぎないが私にとってとても興味深かった台湾の銘傳大学への訪問、そして専修大学台湾校友会との交友に係わらせて一言述べることにしたい。

《銘傳大学への訪問：大学の教育指針と教育を受ける学生の意識》

さて、台湾の地を踏むのは、今回で三度目である。最初に台湾を訪れたのは、私の教え子である何東志君（平成7年、専修大学大学院経営学研究科修士課程修了）が結婚されるに際して、結婚式の主賓として招かれたことによるものであった。当時は台湾から今より多くの人々が本学に留学していたこともあり、

結婚式の後、真にもてなしの精神と愛にあふれた学生たちの時に適ったアレンジにより幾つかの業種の企業を訪問することができ、またそこで企業のトップ・マネジメントとも直接会い、親しくその会社の経営理念や経営戦略に論じ合い、それによって多くの啓発を受けたように記憶している。二回目は、その二年後に何君が無事修士学位を授与されたことを祝して、彼の伯父さん、そして弟らと共に大きく、かつ高級なベンツを用いて台湾特有のスリルに富む山道を上り下りしての台湾一周の旅をした時でした。これら二度の旅行の時はいずれもこの地がさすが亜熱帯であるに相応しく、かなり暑かったように記憶している。また、湿度も相当のものであった。何東志君いわく、「日本の家式に、畳の部屋を作るなど、ととてもとても無理です」。

しかし、今回の調査で訪れた台北の地は、同行した教授の皆さんすべて、「寒い、寒い」の声を連発されるように、予想に全く反して寒風が吹き荒ぶほどの悪天候であった。日本語ガイドを務められた70歳を超えた元気はつらつの男の人によれば（この方は過去に日本の教育を受けた経験があり、日本のことにとっても良く通じていた。そして数度に渡って台湾の人々の日本旅行ツアーガイドをも果たしておられる。わたしたちは、この方のおかげもあって快適な調査と旅が出来た。心から感謝と敬意を表したい、と思うのは私ばかりではなからう）、この寒さは大陸からの寒波到来に起因するとのことであった。「時と予見しえないことが起きる」とは、聖書の教えの一つであるが、予めの備えが無かった故に、大いに難儀したというのが事実である。「対処しにくい危機の時代」である今日、常に用心深くあらねば！！

銘傳大学は、桃園市にある。私たちの宿である庚華大飯店から車でかなりの距離の郊外にあったように思われた。繁華な所ではないので、研究し、学び、物事を深く推考するには良い所である。

わたしたちは、13日（月）の9時30分ごろ銘傳大学に到着した。到着すると直ちに応用日本語学系の教授団が中心となって歓迎セレモニーをして下さった。その後40分から50分の間、銘傳大学の教育方針や教育プログラム、そして学生の要求や資質、そして就職の状況などについて聞き、また私たちの方が

らも専修大学の成り立ち、成長、そして現状、抱える問題などを率直に話し、これを踏まえてなごやかで友好的な雰囲気の中に、自由な討論会を進めることが出来たことはとても良かった。この討論の中で、私自身強く感じたことの1つは、銘博大学が**企業経営の実践に直ぐ役立つ教育**を学生たちにいかにして**施すか**を非常に強く意識している、ということである。**情報技術教育の重視**である。また経営のグローバル化を前提にして、企業経営に貢献し得る、生きた言語教育を、とりわけ国際共通言語である**英語教育**を徹底させようしていることを印象づけられた。

討論会の後、学内の参観が行われた。まず、**バーチャル撮影スタジオ**を見学した。最新の撮影技術を駆使したものである。マスコミを志望する学生の欲求に答えての教育プログラムの一環を成している。**経営技術志向の強さ**を感じさせられた（極めて実利志向的であるとも言えるが）。

次いで**アートセンター**、そして**ホテル実習の場所**を見学した。ホテル実習の場所を見学して、日本人と台湾の人の間ではホテルの風呂場の作りの好みがかなり違うと感じた。日本人の若い夫婦なら、「あのような風呂場は結構！！」と言うであろう、と思ったのである。わたしの取り違えであろうか。

更に**語学ビル**（銘博大学が用意してくれたプリントによれば《観光語文ビル：中国文化教室、日本文化教室、そしてアメリカ文化教室》）を見学する。前述した英語教育の徹底ぶりに注意が引かれた。**ビデオ・コンファレンス・アンド・ラーニング・システム**が採用されている。ビデオを十分に用いるならば、大学内の種々の部門間で、そしてさまざまな大学間で相互にコミュニケーションを行う面で多くの益が得られるであろう。また遠隔学習システムが採用されるならば、教授と学生が場所に異にしているとしても、あたかも場所を同じくして顔と顔を直接見合わせて話しあっている場合と同じように、コミュニケーションを十分に取れるようになるであろう。これらのシステム実施の成果の分析結果と今後の課題について尋ねる機会を逃したのは、残念であった。わが専修大学でも**採用してみる価値**がありそうである。数々の**啓発**を受けた学内の参観であった。昼食を頂いた後、深く感謝とお礼を申し上げ、教授、多くの学生そし

で職員の方々に暖かく見送られつつ銘傳大学を後にした。わたしたち調査団に対して労を借しまず案内と説明の役を担ってくれた学生たちが、巧みな日本語能力を身に着けていたことにも感銘を受けている。

《専修大学台湾校友会との交友》

校友会との交友は3月13日(月)の夕刻の6時ごろから行われた。月曜日であったせいか、少数の卒業生の参集しか得られず、残念であった。週の初日、仕事始めの日でもあり、致し方ないことであろうか。当日会場で校友会の会長から頂いた校友会名簿によると、専修大学の卒業生は、明治の40年代にまで遡っている。その人数を正確に数えたことは無いが、相当の人数の昇ることであろう。国際情勢と諸般の事情によるのであろうが、今、本学に在学する人の少なさはどうしたことであろうか。大学院でかつて私が指導した学生は十数名いるというのに。

今回、校友会の会に参集された人たち、とりわけ年配の長老格の方々は同一に「台湾から専修大学にもっと進学し易いような備えを早急に大学は考えて欲しい」と強く訴えておられたのが印象深い。留学生の受け入れに際しての専修大学のしかとした**基本理念なり、基本方針とは如何なるものなりや？**？

《終わりに》

企業経営は単に経営技術の問題ではない。それが良いものであれ、良くないものであれ、経営理念や経営思想に影響されるのである。社会の価値や文化そして宗教と《企業経営》の関連性を問うべきであろう。経営学を学ぶ者は社会科学の原点に立ち返り、人の生きる道はなにかを探求することに真剣に努めねばならないのである。

台湾への短い企業調査であったが、得ることの多いものであった。研究の専攻を異にする方々との自由な雰囲気での雑談によっても、わたしの学ぶ意欲は刺激されたように思っている。

(2006年8月3日)